

## ばんば親子と歩こう 2

～京の入口・水上都市「淀」を歩く～

実施日・内容	5月7日(木) AM:京の入口・水上に浮かぶ淀城跡と桂川・宇治川に挟まれた水上都市・淀の知られざる名所旧跡歴史散策/PM:黄桜・伏見蔵でランチ・見学
班	A班(第一木曜)
学習テーマ	あなたの知らない東海道(淀中心に)

### 【AM】淀の知られざる名所旧跡歴史散策



①京阪・淀駅集合(A班)



②淀のシンボル「淀の大水車」



③淀の総鎮守「与杼神社」

京阪「淀」駅にA班集合、ばんば哲平先生のガイドで出発。「淀の大水車」は、桂川の水を淀城のお堀へ汲み上げる仕掛けで、記録によって直径四・七・十三メートルと差はあるが城下に二基あったとされる。竹を組み植物の蔓で結んだ造りで、中心軸には毎日約一升の菜種油(堺産か)を差して滑らかに回したそうです。瀬戸内から桂川を上って訪れたオランダ人も驚嘆したと伝わります。与杼(よど)神社は元々、対岸の水垂(みづたれ)町に鎮座しており、明治の桂川大改修で町ごと約五～六百メートル移されて現在地へ。御祭神は肥前国(佐賀県)から勧請された水運の神様で、拝殿は昭和四十六年に国の重要文化財に指定されています。



④一口村・安養寺の石碑



⑤「山城国淀城図」三川合流の水城



⑥想定浸水深 3.0mの電柱表示

「一口」と書いて「いもあらい」と読む難読地名。弘法大師・空海が唐より戻り諸国を巡られた折、漁師たちが川で芋を洗うのを見て一口頬張られたという伝説など、由来は諸説あります。安養寺の縁起にも空海伝説があり、悪行ばかりしていた漁師「悪太郎」の枕元に観世音菩薩が現れ、夢告のとおり巨椋池の泥中より十一面観世音像を掘り出して祀ったのが寺の起り。悪太郎は名を改め「弥三郎」になったと伝わります。石碑には「ここより南十五丁(約一・六km)に安養寺あり」と刻まれます。淀城は伏見城の遺材を転用し、姫路城・大阪城などの部材も組み合わせた“継ぎ接ぎの城”で、桂川・宇治川・木津川と淀川に四方を囲まれた「水上に浮かぶ城」。城下と城を結ぶ道は鉤の手に折れ曲げ、延焼や見通しを防ぐ造作になっています。今も街中の電柱に「最大浸水深 3.0m」の表示があり、水と共に生きる町の姿を伝えています。

## 【AM 続き】京都競馬場・緑の広場



⑦京都競馬場「緑の広場」入口



⑧JRA 京都競馬場スタンド



⑨観覧席で講義を受ける一行



⑩ばんばふみお先生（86 歳）

京都競馬場の前身は、明治四十年（1907年）京都市下京区・島原に開設された「島原競馬場」。火災で焼失後、京丹波町の須知（しゅうち）競馬場へ移り、賭式が景品から金銭へと法改正された後、巨椋池を干拓した現在地へ大正十四年（1925年）に移転。今年で百一年目を迎えます。

スタンド裏の「緑の広場」は誰でも自由に入れる開放空間で、芝生と楠の大樹が心地よい木陰を作っていました。観覧席をお借りして、ばんば先生から東海道五十七次・淀宿の歴史、明石「和坂（かにかさか）」や京都「千本通」の地名由来（弘法大師・菅原道真伝説）まで実に多彩なお話を拝聴。また、哲平先生の父ばんばふみお先生は御年八十六歳と思えぬ張りのある声と歩調に、参加者一同感服でした。

## 【PM】黄桜・伏見蔵 ～ ランチ&酒蔵見学～



⑪黄桜「伏水蔵」入口



⑫Kizakura 特製ランチ膳



⑬待望の一杯飲みながらの食事

午後は伏見・横大路の黄桜「伏水蔵（ふしみぐら）」へ。ガラス越しに仕込みの様子が見られる工房型の酒蔵で、入口では金色の河童が手を振ってお出迎え。お楽しみのランチは、季節の天ぷら・お造り・炊き込みご飯に小鉢が並ぶ「Kizakura 膳」。蔵見学では伏見の名水「伏水（ふしみず）」と酒造りの工程を学び、A 班の親睦も一段と深まる一日となりました。